

高橋 孝 (著)
荒井邦佳 (執筆協力)

胃癌外科の歴史

山口俊晴

がん研有明病院副院長・消化器センター長・消化器外科部長

高橋孝先生が「臨床外科」誌に連載されていた『胃癌外科の歴史』が、このたび荒井先生の努力で見事に単行本として発刊されたことは、この連載を愛読していた筆者にとっても大きな喜びである。高橋先生を大腸の外科解剖の大家としてご存じの方も多いと思うが、本書を一読すれば、高橋先生の胃外科、解剖に対する並々ならぬ情熱と、知識の深さを容易に理解できる。

わが国における癌手術の確立に、癌研附属病院の梶谷鑑先生が最も重要な役割を果たしたことは紛れもない事実である。その元になる思想がどのように形成されてきたのであろうか。本書をひもとくことで、ビルロート、ミュックリッツ、三宅速先生から、梶谷先生の師である久留勝先生とつながる、胃癌リンパ節転移への「まなざし」こそが梶谷先生の偉業の礎になったものであることがよく理解できる。

強い意志と高邁な理論に基づいて癌と戦ってきた梶谷先生のこの「ま

なざし」が、ともすると誤解され、忘れられようとしている実態を憂い、これを後世に残そうという高橋先生の情熱が本書を作らせたのではないか。そのために単に歴史的な事実を羅列するのではなく、たとえ歴史的に高名な方であろうと、その誤解や誤りについては率直に批判している。腹腔動脈周囲リンパ節 8a, 8p の問題点については、個人的にも同意できる部分が多い。14V についても、歴史的な観点から貴重な意見が述べられている。

後半では Dutch Trial など諸外国の RCT に対する批判的な見方が述べられているが、おおむね妥当な評価だと思う。わが国の大動脈周囲リンパ節郭清の RCT, JCOG9501 についてもかなり批判的な意見が書かれているが、欧米の Trial に比較して本研究の精度は極めて高く、その意見の中には必ずしも肯首できない点もある。ただ、標準化に走るあまりに、個別化という観点も忘れるべきではないという指摘はそのとおりで

あろう。むしろ、高橋先生の苛立ち、本研究ではリンパ節転移というものに対する「まなざし」から提唱された拡大郭清という試みが否定されただけであり、胃癌治療成績の向上に資するものではないというところにあるのかもしれない。

がん研に赴任してから、高橋先生と過ごした手術室の濃密な緊張した時間を懐かしく思い出すとともに、厳しくも真摯なご指導に今は深く感謝するばかりである。そして先生の最後のメッセージともいえる本書を手にして、あらためて早過ぎる先生の死を悼むのは筆者だけではあるまい。

最後に未筆ながら、高橋先生の意を十分に汲み取って本書を取りまとめた荒井先生の努力に深い敬意を表する。

●B5/頁 272/2011 年/定価 9,450 円
(本体 9,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00902-7]

医学書院 刊